



樹上の銀 *Silver on the Tree*
(1977) スーザン・バー (浅羽英子訳)
評論社 (10/30刊・¥1800)

《闇の戦い》四部作の完結篇である。(実際は五部作で、その第一作目だけが学研から出ている)。

シリーズの全登場人物が集まり、《闇》と最後の戦いがはじまる。戦いは時間を越え、アーサー王の時代と現代とで、同時に起こるのだ。主人公ウィルと、アーサー王の息子ブラアンとは、遠い昔に水没した《失せし国》へと《光》の剣エイリアスを探しに旅立つ……。

このシリーズは、一言でいってしまうと、ケルトの伝統の流れるイギリス西部(ウェールズ近辺)の風俗と、アーサー王伝説との混淆といえる。《光》と《闇》の戦いというモチーフ自体、さほどめずらしくはないけれど、それと前者の特徴とがなじみづらいになって、なかなか面白いファンタジイに仕上げられているのだ。ただ、本書だけは、やや感触が異なっている。舞台を次々と変え、無数の時間が交錯するストーリーは、どこかゼラズニイの「アンバー」を思わせる。

それまで、毎年一冊書かれていたシリーズのうち、本書だけが一年の空白の後、出版されている。シリーズとしてのバランスはともかく、力作であることは間違いない。(俊)